◇◇◇

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

目次

「今月の海の生きもの」オニヒザラガイ・・・・・・・・・・・・1
1.　「海の生き物を守る会」の活動について・・・・・・・・・・・・2
切手に見る「ジュゴンとマナティの生き残る道」(5)　立川賢一・・3
2.　海の生き物とその生息環境に関するニュース・・・・・・・・・・5
3.　海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報・・・・・・・10
4.　「ジュゴンを追って（５）」　（向井　宏）・・・・・・・・・・17
5.　きらめく動物たちの命と海　久保田信の白浜だより（その 31）・20
6.　事務局便り・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
7.　編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

1.「海の生き物を守る会」の活動について

全国の砂浜海岸生物調査にご協力下さい

海の生き物を守る会では、NPO法人OWSと共同で全国の砂浜海岸生物調査を実施しています。日本の砂浜を生き物のために取り戻そうと計画された調査です。調査は誰でもできる方法で計画されていますので、少しでも多くの人が、多くの海岸でこの調査に参加していただけるようにお願いいたします。ご協力いただける方には、方法と調査報告用紙をメールでお送りいたします。当会のホームページ には、pdfファイルで報告用紙を掲載しています。http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html

これまでに会員や非会員のみなさまから寄せられた調査票は101枚、全国70ヶ所の砂浜で調査が行われました。全国の砂浜調査にするには、まだまだ多くの海岸で調査が必要です。ぜひともみなさまのご協力をお願いします。毎年1回程度の頻度で、研修会も行っております。希望があれば、各地で実施することも検討します。どうぞご希望をお寄せ下さい。

これまで調査された砂浜の都道府県は以下の通りです。( )内は調査した砂浜海岸の数。

北海道 (5)、青森県 (1)、神奈川県 (5)、千葉県 (5)、静岡県 (2)、愛知県 (1)、三重県 (5)、和歌山県 (2)、福井県 (9)、京都府 (7)、大阪府 (2)、兵庫県 (1)、香川県 (2)、徳島県 (1)、愛媛県 (1)、高知県 (5)、山口県 (2)、福岡県 (1)、大分県 (2)、宮崎県 (1)、鹿児島県 (7)、沖縄県 (3)

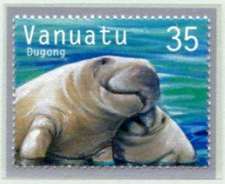
まだ調査が一ヶ所も行われていないのは、秋田、山形、岩手、宮城、福島、茨城、東京、新潟、富山、石川、鳥取、島根、岡山、広島、長崎、佐賀、熊本の都県です。ぜひ、ご協力ください。また、同じ海岸でも季節が違えば結果も異なります。同じ季節でも、気象によって結果も異なります。いつでも、どんな砂浜でも、調査する価値はあります。お気軽にご参加ください。

切手に見る「ジュゴンとマナティの生き残る道」(5)

立川賢一

1－1－2. ジュゴンの母と仔

ジュゴンは成長すると、体長は約3mまで、体重は約450kgまでになるそうです。6～17歳で成熟し、繁殖可能となり、13～15ヶ月間の妊娠期間を経て一頭の仔を生みます。約2年間、母獣は授乳しながら仔獣を育てます。友人からの話ですが、ジュゴンの母仔が仲良く遊泳しているのを空中から見かけたことがあるそうです。ジュゴンの授乳の姿が人魚に見えるのでしょうか？ジュゴンは比較的長寿で、約70歳まで寿命があると言われています。



4

（つづく）

「守りたい砂浜海岸」募集

海の生き物を守る会では、現在行っている砂海岸生物調査を発展させ、砂浜海岸の環境を守る運動につなげるため、全国から「守りたい砂浜海岸」を募集しています。ここはぜひと思う砂浜海岸がありましたら、事務局 hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp までお寄せ下さい。応募方法は、メールで「砂浜海岸の名前」「砂浜海岸の位置または住所」「推薦する理由」を明記の上、ご応募下さい。これまで「日本の渚100選」や「日本の白砂青松100選」などが選ばれていますが、これらは観光を目的としたものなども多く含まれています。海の生き物を守る会では、自然海岸の景観や生態系を守りたい砂浜海岸を対象として選びたいと思います。ぜひとも、推薦をお願いします。

これまでに推薦があったのは、１．鹿児島県肝属郡辺塚の砂浜、２．和歌山県東牟婁郡那智勝浦町粉白海岸、３．愛知県伊良湖岬から東の表浜海岸、４．沖縄県南城市百名海岸の４ヶ所です。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

下記の報告書と雑誌、希望者に差し上げます。向井　宏 hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp までお知らせ下さい。送料はご負担下さい。

◎第７回自然環境保全基礎調査「浅海域生態系調査（干潟調査）報告書」2007年環境省自然環境局　生物多様性センター　p.235　出現種リスト付き　CD付き　余部が多数あります。

◎日本自然保護協会・沿岸環境保全検討会提言　「日本の海洋保護区のあり方～生物多様性保全をすすめるために～」　日本自然保護協会　余部些少。

◎「有明海講演会　カキ礁復元による有明海再生講演集」　NPO有明海再生機構　2008　残り１部

◎「有明海の特異な生物相―諫早湾の環境復元の意義―」　有明海の生物多様性保全のための四学会合同シンポジウム講演要旨集　2010　余部多数あり

◎「辺野古・大浦湾周辺の自然　Exploring the Nature of Oura Bay and its surrounding area」 日本語英語併用版　余部多数あり

2. 海の生き物とその生息環境に関するニュース

【全国】

●ニホンウナギを絶滅危惧種に指定　環境省

高級食材として日本人が好むウナギが、近年極端にシラスの遡上数が減少していることから、環境省がこれまでレッドデータブックで「情報不足」としていたニホンウナギを、「絶滅の恐れがある種（絶滅危惧種）」に指定し、その中では危険度が低い「絶滅危惧 II 類」にする方針を固めたと報道された。絶滅危惧 II 類に指定する要件としては「過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて 30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない」ことが挙げられている。ウナギだけではなく、汽水性・淡水魚類についてのレッドリストの見直しを行うこととしている。国内におけるシラスウナギの漁獲量は、1960 年代に 230 トンあったが、現在では 10 トン弱まで減少している。川にすむ親ウナギの漁獲量も 60 年代の 20 分の 1 近くに減少している。ウナギの減少の大きな要因は、シラスウナギの乱獲と、河川の改修、池や沼の減少、田んぼの畦のコンクリート化などによる生息場所の破壊が大きいと思われる。コンクリートから人への政策転換がここでも重要だ。

【東北】

●大船渡越喜来地区では　防潮堤を内陸に移動

2011 年の大津波で壊された防潮堤を再び作る計画が東北三県で進んでいるが、岩手県大船渡市越喜来地区では、住民の意見を入れて、震災前の位置よりも最大 200m ほど内陸側に設置して復旧することになった。越喜来地区では、震災前には 7.9m の防潮堤が海岸沿いに作られていた。しかし、3.11 の大津波で防潮堤は崩壊、多くの住宅が流され、死傷者も多く、壊滅的な被害を受けた。このたびの国交省が示した防潮堤再建案では、11.5m となる予定である。岩手県は、当初、元の場所での防潮堤の再建を提案したが、地震による地盤沈下で、防潮堤の内側も海に返っている。住民らは、そのために防潮堤をこれまでよりも大きく内陸側に移転するよう希望し、県もそれを受け容れた。工事は、来年 3 月から 2016 年 3 月までに行う予定である。宮城県気仙沼舞根地区の住民は、ほぼ全員の総意として防潮堤の建設に反対しているが、宮城県知事は防潮堤建設に固執し、住民の意見を拒否する構えである。ゼネコンが大規模防潮堤建設に大張り切りで、震災復興に名を借りて、再び人からコンクリートへ向かう公共事業が復活しそうである。

【関東】

●お台場海浜公園で　ゴミ拾い

水辺の環境保全に取り組んでいる団体の「アクアソーシャルフェスティバル」が、東京都のお台場海浜公園で開かれ、参加した団体の 90 人が「東京ベイ・クリーンアップ大作戦」と称して、海浜公園のゴミ拾いを行った。クリーンアップ大作戦は、毎年 3 回ずつ行われており、今回は 3 回目にあたる。「アク

アソーシャルフェスティバル」は、トヨタ自動車の発売している自動車「アクア」にちなんで、トヨタが全国規模で支援しているキャンペーンの一環である。浜辺のゴミ拾いには、環境上プラスの面とマイナスの面がある。環境を良くするために、ゴミを拾えばいいと言うものではないのだ。いつまでもゴミ拾いを環境教育や環境問題の解決策と考えている日本の環境保全団体には、そろそろその無意味さを自覚してもらいたいものだ。

●海浜の侵食が深刻に　三浦半島北下浦海岸

三浦半島東側にある横須賀市北下浦海岸で、砂浜海岸の侵食が深刻になっている。横須賀市では、これまで 5km にわたって離岸堤や人工リーフを築き、対策を講じてきたが、砂浜の減少は止まらない。また、離岸堤や人工リーフについては、住民からも景観を壊しているという不満が寄せられている。北下浦海岸の浸食は、約 40 年前から始まり、砂浜は消失を続けている。横須賀市では、2005 年に策定した浸食対策基本計画によって、沖合に人工リーフをつくって波の力を弱めた上で、浜に砂を加える養浜計画を実施する予定だったが、台風や高潮などで階段式護岸が破壊され、砂が逆に沖合にさらわれ、護岸も沈下するなど対策は後手後手に回って、砂浜消失の危機は増大した。そのため、横須賀市では 2010 年に対策を大幅に見直し、人工リーフを減らし、離岸堤を倍増させ、コストを減らし保全範囲を拡大するようにした。その結果、景観は劣化するばかりだ。住民からは、高波対策を要望する声も強いが、「浸食の原因を究明できれば、景観を壊さずに防災を進める手法もあるのでは」と言う本質的な疑問を述べる人もいる。その通りだ。砂が減少する原因がダムや港湾による砂の供給経路の分断にあることを、きちんと踏まえて根本的な対策をとらないかぎり、いつまで経っても膨大な経費を使ってコンクリートで海岸を固めるしかないだろう。そうして、日本の海岸の景観と生物多様性は、最後まで失われていく。

【東海】

●大谷海岸でウミガメが次々孵化

三重県常滑市の大谷海岸でも、7 月 11 日にアカウミガメの産卵が見られた。それから 50 日が過ぎたころ、アカウミガメの子供が孵化、次々と砂の中から這い出してきた。大谷海岸ではほかにウミガメの産卵は見られていないので、この赤ん坊ウミガメは、7 月 11 日産まれた卵が孵化したものと考えられる。夏休みでもあり、付近は多くの見物客で賑わった。

【北陸】

●世界で初めて　トモエガモの渡りルートを解明

石川県加賀市は、ラムサール条約登録湿地の「片野鴨池」に飛来するトモエガモの飛行ルートを日本野鳥の会とともに調査をしていたが、ロシアの北極圏までの詳細なルートを始めて明らかにしたと発表した。加賀市ではトモエガモの繁殖地であるロシアや、経由地の中国などと連携を強め、国際的な保全を呼びかける予定である。調査は、加賀市の伝統的な鴨猟法の「坂網猟」を使ってトモエガモを捕獲し、発信器を取り付け、衛星を利用して追跡した。これまで完全に追跡できたのは 2 羽だけであった。加賀市ではこの結果を生かし、片野鴨池のラムサール登録範囲を拡大していくことを計画している。

【近畿】

●太地町　追い込み網猟が解禁　マゴンドウなど捕獲

和歌山県太地町では、小型鯨類の追い込み網猟が解禁になった。太地いさな組合は、9 月 1 日の解禁の日に、さっそく 12 隻の船団をひきいて出漁したが、結局この日は、鯨を一頭も見つけることができなかった。結局、最初の鯨猟が行われたのは、9 月 7 日だった。この日は、20 数頭のマゴンドウを畠尻湾に追い込み、捕獲した。イルカ猟に抗議をする「セーブ・ジャパン・ドルフィンズ」などの団体も姿を見せたが、警察や保安庁などの厳重な警戒にあい、右翼団体との小競り合いがあったほかは、目立った混乱はなかった。この日、捕獲したマゴンドウは、主に食用とし、一部は博物館に売却する予定。追い込み網猟は、国際捕鯨委員会（IWC）の規制対象外になっている。

●イルカ肉の水銀汚染　測定結果を公表

国際的な自然保護団体である「エルザ自然保護の会」が、アメリカ海洋保護団体「ブルーボイス」と共同で行ったイルカに含まれる水銀、メチル水銀、PCB の検査結果を発表した。それによると、昨年 5 月に和歌山県太地町のスーパーで販売していたイルカの肉、7 検体の検査では、すべてが暫定的規制値を超える汚染を示していた。とくに最高値は総水銀が 7.32ppm で、暫定的規制値の 18.3 倍となり、メチル水銀は 2.6ppm で 8.66 倍、PCB は、9.6ppm で、規制値の 19.2 倍であった。太地町長は、「イルカの肉の汚染は風評被害だ」と言っているが、それは住民の健康を保証すべき自治体の責任者としては明らかにおかしな発言である。太地町の住民の毛髪からは、他の自治体の住民と比べてかなり高い濃度の水銀が検出されている。このままでは、住民に深刻な健康被害が起こる可能性が高い。

●アカウミガメの孵化　白浜町でも続々

和歌山県白浜町日置の砂浜海岸では､今年夏までに産卵されたアカウミガメの卵が次々と孵化している。今年は昨年の 2 倍にもなる合計 29 回の産卵が見られたが、産卵の調査をしているすさみ町エビとカニの水族館のスタッフは、雨などの浸水で孵化率は悪いと言う。日置大浜の砂浜では、今年 5 月 17 日以降、96 頭が上陸し、29 回の産卵があった。8 月 9 日に始まった孵化は、次々に続いているが、これまでの孵化率は約３０％程度と低い。自然のままでの孵化率は、せいぜいその程度であろうと言う。人間の過保護で孵化率を上げることが、果たして良い事かどうか、考えるべきだろう。それよりも、海岸を埋めたて、コンクリートで固めて、ウミガメの産卵を阻害していることをなんとか止めるべきではないだろうか。

【中四国】

●中海でトゲノコギリガザミを初記録

島根県中海の北部海域でカニ漁をしていた漁業者のカニ篭に、南方のマングローブ域に生息するトゲノコギリガザミが捕獲され、島根県立宍道湖自然館ゴビウスに寄贈された。トゲノコギリガザミは、マングローブガニとも呼ばれ、熱帯・亜熱帯地方でもっとも美味とされるカニで、日本では沖縄や本州太平洋側の高知県や浜名湖あたりにも分布する。捕まったトゲノコギリガザミは、甲羅の幅は 17cm、鋏を拡げると 25cm にもなる大型の雄。中海で捕獲された記録はこれまでにない。

●暖海のクラゲが大量発生　山口県沖日本海

山口県沖の日本海では、暖かな海に生息するクラゲ類が大量に発生しているのが発見されている。発生しているのは、エビクラゲやタコクラゲのような日本海では珍しい種類で、南の海に多いものである。山口県長門市の大泊漁港と久津漁港で、タコクラゲが 1000 個体以上も見つかった。8 月の萩市沖の日本海で平均水温が 28.2℃と過去最高を記録したこともあり、水温の上昇が暖海系のクラゲ類の発生を促進したことが推測される。

●アワサンゴが一斉に産卵

山口県周防大島の南東沖のニホンアワサンゴの群生地で、今年も一斉産卵が見られた。オレンジ色をした卵を一斉に放出する幻想的な光景が見られた。周防大島のニホンアワサンゴ群生地は、水深 13~14m の海底に広がっている。繁殖期は 8 月下旬から 10 月中旬にかけてゆっくりと産卵が行われるが、今年は 9 月に入って一斉に産卵が行われている。環境省では、周防大島のニホンアワサンゴ群生地を瀬戸内海では初めて、海域公園地区に指定することを予定している。

●「原発の新増設を認めない」　上関原発計画を白紙に

民主党政府が新エネルギー政策についての大枠を発表した。それによると、原発への依存を減らして、2030 年代には、原発ゼロを目指すよう努力することが明記された。それとともに、原発の新増設は行わないこととされている。これが最終的な閣議決定になれば、現在計画段階で工事が着手されていない上関原発建設計画は、中止されることになる。奇跡の海と呼ばれるようになった長島・祝島周辺の海域の自然は、なんとか守られることになりそうだ。まことに喜ばしい。ただし、民主党政権は衆議院解散によって下野する可能性があり、その後の政権によっては、再び原発依存の方向へ梶を切る可能性が無くなったわけではない。中国電力も政府の動向を注視しており、簡単に完全に断念するとは思えない。まだまだこの海域の海の生き物にとっては、厳しい情勢が続くことになりそうだ。

●シオマネキが激減　吉野川河口干潟

徳島市を流れる吉野川の河口干潟で、シオマネキの個体数が激減しているという。ここで観察会を行っている自然保護団体によると、数年前までは周辺の干潟がシオマネキで埋め尽くされるほどだったのが、今年は見つけるのに苦労するほど減少しているという。シオマネキは、国のレッドデータブックでも絶滅危惧種に指定されている希少なカニであるが、吉野川河口干潟ではそれほど珍しい種類ではなかった。シオマネキは泥質であし原があるような場所を好み、吉野川河口の住吉干潟は生息に最適な条件を持っているが、今年はほとんど見つかっていない。原因はよく分かっていないが、昨年の台風による干潟の環境変化を指摘する声もある。

●鳴門市で希少種のクジラが死亡　イチョウハクジラ

9 月 5 日に徳島県鳴門市鳴門町土佐泊浦の千鳥ヶ浜に、クジラが打ち上げられているという住民からの連絡があり、当初、鳴門市や徳島県水産研究所の担当者は、体長 4.7m のツチクジラの子供ではないかと見た。その後、国立科学博物館や愛媛大学・九州大学などの合同調査団によって、世界的にも希少なイチョウハクジラであることが判明した。イチョウハクジラは、オウギハクジラ属に属する珍しい鯨で、イ

ンド洋などに生息するが、個体数も少なく希少種である。日本ではこれまで打ち上げられた例はわずか10 例ほどしかない。

【九州】

●排水門開門調査費を示さず　農水省開門に及び腰　長崎県知事は開門を批判

農水省は、国営諫早湾干拓事業の潮受け堤防排水門を長期開門するように裁判所から求められていることについて、研究者らや佐賀県が求めている全面開門ではなく、一部の「制限開門」を実施することにしている。農水省はこのたび 2013 年度予算の概算要求を発表したが、その中では、具体的な調査費を明示しない「事項要求」とした。排水門開門調査に反対する長崎県知事は、郡司彰農水相と会談し、「開門調査をしても有明海の環境改善には繋がらないことは科学的に明らか」とし、開門調査の環境アセスメントでは、地元意見がまったく反映されていないとして、手続きをやり直すよう求めた。農水省は裁判所から長期開門調査の決定が下されているが、もともとやりたがっていないことなので、長崎県の反発を理由に、事前ボーリング調査もほとんど進めていない。この国営諫早干拓事業も、もともと不要になった水田開発のための無駄な公共事業を、止められない役所の体制のまま行ってしまい、研究者らが指摘していた有明海全体の環境悪化を引き起こしたものである。自民党から民主党政権に交代になっても、無駄な公共事業を止められないこの事業は、役所の官僚機構の仕組みに問題があることを示すもっとも良い事例である。

●五島でもウミガメの孵化が続く

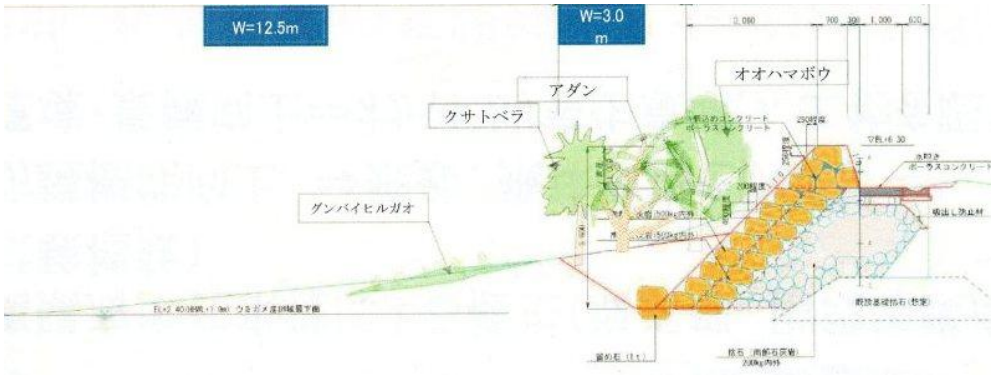
長崎県新上五島町奈良尾郷の高井旅海水浴場で、アカウミガメの卵が次々と孵化し、これまでに 150 匹以上のウミガメの赤ちゃんが海に帰っていった。高井旅海水浴場では、昨年は産卵が確認されなかったが、今年はこれまでに 5 回の産卵があり、8 月 24 日に第 1 回目の、9 月 7 日に第 2 回目の孵化があった。孵化の知らせに 30 人以上の住民らが集まり、孵化と海への帰還に、応援の声を上げていた。

【沖縄】

●ジュゴンの来る嘉陽海岸に　護岸建設

沖縄県名護市東部の嘉陽の砂浜海岸に、防波堤を建設することが決まり、10月にも工事が始まることになった。この防波堤は、台風などの高波で、砂浜と道路を越えて住宅に海水や砂が流れ込んだことから、住民の要望があるとして、高波対策として沖縄県が計画したもの。嘉陽海岸はジュゴンがしばしば餌を求めて訪れることで有名な海岸で、汀線から砂浜、アダンやモンパノキ、モクマオウその他の海浜植物帯まで自然のままに残された貴重な海岸であり、地元住民や研究者からコンクリート護岸を作ることに強い反対の声があった。そのために計画が一部見直されることもあったが、護岸工事そのものは実施されることになった。当初の計画は、海岸の植生帯の真ん中に高さ5m のコンクリート護岸を建設することとしていたが、住民の批判を考慮して、植生帯のもっとも道路よりを幅1.5m ほど伐採し、そこに石積みの護岸を作ることとした（セットバック方式の採用）。それでも現在の植生帯が往時よりもかなり減少しており、場所によってはこの護岸工事で植生帯が維持できなくなる場所もある。海岸沿いの道路を何が何でも防護しようとするなら、海浜に護岸を作らざるをえなくなるのは、どこの場合でも同じである。道路は台風時は通行止めになることを覚悟すれば、道路の陸側に護岸を作り住宅を守ることとすれば、

海岸の貴重な自然は守ることができる。その良い例は、石垣島の川平湾奥の道路を廃止して、峠に道路を建設し、車はそちらを通すようにしたことが挙げられる。この対応で、川平湾奥は、昔と同じようにほとんど人手が入らず、自然環境がそのまま残された。道路を海岸に通さないことが海岸の自然環境を守るためには、必須である。今後、海岸道路のあり方を考え直すことが全国の海岸で求められる。



嘉陽海岸で実施が予定されている護岸工事の概要図

3. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報

【北海道】

●第二回海洋教育セミナー「これからの海洋教育を考えるセミナー」

日時：　　2012 年 9 月 16 日（日）　13：30～16：30

会場：　　ホテル法華クラブ函館　〒040-0011 北海道函館市本町 27-1

趣旨：2007 年 7 月に施行された海洋基本法には「学校教育及び社会教育における海洋に関する教育の推進」が明示されており、現在、学校教育に海洋教育を取り入れるための具体的な動きが始まっています。では、学校教育以外での学びの場で、より質の高い海洋教育が一般の人たちの手に届きやすい形で提供されている状態をつくるにはどのような方策があるのでしょうか。人々の海洋リテラシー（海に関する基本的な素養・教養）を高めるためには、学校教育においても学校外の学びの場においても海について学ぶ機会を増やすことが重要です。そのために、学校や社会教育施設での海洋教育の現状と課題、海洋教育を推進するために学校教育外にある指導者や施設・組織に求められることなど、これからの海洋教育の在り方や普及にむけた戦略をこのセミナーで考えます。

対象：海洋教育の推進に興味のある方、実践している方、実践したい方、海洋教育を提供できる施設の方など、どなたでも参加いただけます。

定員：　　30 名程度　　参加費：　　無料

申し込み：　email、電話などで氏名・連絡先・人数をお知らせください。海の自然史研究所 info@marinelearning.org　TEL 098-936-2722　函館国際水産・海洋都市推進機構 office@marine-hakodate.jp　TEL 0138-43-0220　北海道大学大学院水産科学研究院　水産・海洋コーディネーター養成事務局　coordinate@fish.hokudai.ac.jp　TEL 0138-40-5544

プログラム：

第 1 部 講演および情報提供　＜講演者＞

藤田　喜久（NPO 法人海の自然史研究所　代表理事）

神田　優　（NPO 法人黒潮実感センター　センター長）

都築　章子（NPO 法人海の自然史研究所　研究員・滋賀大学大学院教育学研究科　共同研究員　）

第 2 部 パネルディスカッション　＜パネラー（50 音順）＞

伊藤　晶　（一般財団法人函館国際水産・海洋都市推進機構　主査）

神田　優　（NPO 法人黒潮実感センター　センター長）

申　東煥　（北海道大学大学院水産科学研究院　水産・海洋コーディネーター養成事務局）

西川　正一（北海道函館水産高等学校　教諭）

藤田　喜久（NPO 法人海の自然史研究所　代表理事）

宗原　弘幸（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター臼尻水産実験所　所長）

共催：一般財団法人 函館国際水産・海洋都市推進機構、北海道大学大学院水産科学研究院　水産・海洋コーディネーター養成事務局、NPO 海の自然史研究所

【東北】

●南三陸町自然環境活用センター復活支援プロジェクト

南三陸町自然史こどもワークショップ

【関東】

●江奈湾干潟保全活動　漂着ゴミ、投棄ゴミ回収活動

神奈川県三浦市に位置する江奈湾は、県下に残された数少ない前浜干潟で、たいへん希少な環境です。

OWS では、江奈湾の保全活動を実施しています。今回は干潟内に放置されている漂着ゴミと投棄ゴミの回収活動を行います。是非、ご協力ください。

開催日　：2012 年 9 月 29 日(土)

開催場所：三浦半島江奈湾（江奈バス停前集合）

対象者　：中学生以上

参加費　：無料(昼食、飲み物持参)　※保険料実費(500 円)が別途必要になります。

詳しくはこちらをご覧ください。⇒ http://www.ows-npo.org/NL/s1u7/b0xbtkw0zjjehmtpidJ32

●北限域の造礁サンゴ分布調査　「井田探索調査」

造礁サンゴ探索調査を伊豆半島西岸の井田ビーチポイントで実施します。このエリアからもサンゴの目撃情報をいただいています。どんなサンゴがどのくらい生息しているのか、探索調査で明らかにします。調査が初めての方もご参加いただけます。是非ご協力ください。

開催日　：2012 年 10 月 21 日（日）

開催場所：静岡県沼津市井田ビーチ

募集人数：10 名（最少催行人員 6 名）

集合　　：井田ダイビングセンター　9：00 集合

参加実費：OWS メンバー：10,000 円／非会員：11,300 円　※2 ビーチダイビング費・保険料含む

引率　　：後藤健太郎（インストラクター・ＯＷＳネイチャーガイド)

対象者　：30 本以上の潜水経験者

詳しくは、こちらをご覧ください。⇒　http://www.ows-npo.org/NL/s1u7/b0xbukw0zjjehmtpidaf5

●千葉県の魚は食べても大丈夫？　「ママうみ」プロジェクト

「お魚コーナーで、福島、宮城、茨城の魚はあまり見かけなくなったけれど、千葉県産の魚は売られています。食べても大丈夫？」こんなみなさんの声を受けて、『ママうみ』はスタートしました。『ママうみ』は、みなさんが気軽に参加できる、みなさんが主役のプロジェクトです。

http://www.greenpeace.org/japan/mamaumi/?sup20120901

このプロジェクトは：

千葉県の主要漁港で水揚げされる魚介類の放射能を定期的に検査し、すべての調査結果をグリーンピースのウェブサイトで公表

↓

消費者が安心して買い物できる情報を提供し、風評被害を払拭して漁業関係者を支援

↓

千葉県だけでなく、福島県、宮城県、茨城県などでもこの体制を整える提案をし、放射能被害を受けた多くの漁業・水産業の復興を支援

↓

放射能汚染の問題だけでなく、子どもや孫の世代のごはんから魚が消えてしまうかもしれない過剰漁業を防ぎ、海の生態系をまもることにもつなげるものです。

詳しくは、ウェブサイトでご覧ください。http://www.greenpeace.org/japan/mamaumi/?sup20120901

●第 111 回自然観察&クリーン!! ラムサール条約と干潟の鳥

ラムサール条約湿地を未来の子どもたちへ! 干潟のレストランに集う鳥たち

日 時：9 月 29 日（土）10 時 三崎口駅前集合

講 師：須藤伸三氏 別府史朗氏

持ち物：長靴、お弁当、飲み物、雨具、（あれば）双眼鏡、小さなお子さまは着替えもあると安心です

●ラムサール COP11 と IUCN・WCC の総括会議

日時：2012 年 9 月 17 日（月・祝）午前 10 時～午後 4 時 30 分

会場：雑司が谷地域文化創造館　第 1 会議室

http://www.toshima-mirai.jp/center/e_zoshigaya/

東京都豊島区雑司が谷 3-1-7 千登世橋教育文化センター内

東京メトロ副都心線 雑司が谷駅 2 番出口上　　JR 山手線 目白駅下車 徒歩約 10 分

お問い合わせ：ラムサール・ネットワーク日本　E メール info@ramnet-j.org

●講演：お魚はどれだけ汚染されているのか？

グリーンピース・ジャパン 海洋生態系問題担当 花岡　和佳男が、魚介類の放射能食品調査の結果と企業側の取り組みについて、最新情報をお届けします。私たち日本人の食卓にはお魚が欠かせませんが、昨年の原発事故以来、海洋汚染が騒がれ、何となく気にしながらも、どうしていいか判らずに不安に思いながら食べている方が多いかと思います。実際どれくらいの魚から、どの程度の放射能が検出されているのか、調査船派遣や、企業へのアプローチから得た情報を、海洋調査担当 花岡和佳男が、ワークショップ形式で参加者全員とディスカッションしながらお話しします。

日時： 9 月 22 日（土）13:20～16:00

場所： 越谷市中央市民会館　第 1 会議室(東武伊勢崎線越谷駅東口より徒歩 7 分・越谷市越ケ谷 4-1-1)

参加費： 500 円

定員： 30 名

主催： 5 年後 10 年後子どもたちが健やかに育つ会・越谷様　勉強会

申込方法： 下記の主催団体ウェブサイトからお申し込みください。

http://sukoyaka-koshigaya.jimdo.com/%E6%B4%BB%E5%8B%95%E5%A0%B1%E5%91%8A/%E5%8B%89%E5%BC%B7%E4%BC%9A/

●多摩川河口周辺のハゼ釣り調査

【東海】

●日本陸水学会第 77 回大会　公開シンポジウムのお知らせ

「陸水学は社会的存在になり得るかー長良川河口堰問題を事例としてー」

日時：2012 年 9 月 16 日（日）9 時～11 時 30 分

場所：名古屋大学全学教養棟　http://www.nagoya-u.ac.jp/global-info/access-map/access/

河川、湖沼、湧水、地下水等、陸水学の研究の場は、いわゆる「水資源」獲得の場でもあり、人間活動と密接に関わっている。そのため、陸水という場には、開発と保全の狭間で様々な史実が蓄積されてきた。そして陸水学は、それらへの関わりを通じて発展してきたとも言える。例えば、古くは木曽三川河口資源調査団（KST，1963～1967 年）、びわ湖生物資源調査団（BST，1962～1965 年）には、生物学系を中心とした多くの陸水学者が参加していた。しかしながら、その後の大型研究、例えば国際生物学事業（IBP）、琵琶湖国際共同観測（BITEX）では、基礎科学研究の面が強くなり、いわゆる陸水学の中核となる研究（者）は、人間社会との直接的な関わりが少なくなっていった。一方、1990 年代以降、長良川河口堰、川辺川ダム、有明海、中池見湿地、設楽ダム等において、開発と保全をめぐる激しいせめぎ合いが起こり、一部の陸水学者が、積極的に関わる場面が見られるようになってきた。そこで、科学の社会への説明責任が問われる今、本シンポジウムでは、開門の是非を核に熱い論争が生じている長良川河口堰を事例として取り上げ、陸水学と人間社会との関わりについて議論する場として企画した。今回は、敢えて講演者を絞り、フロアからの質問を絡めて深い討論となることを目指す。

基調講演（招待講演）：立石裕二博士（関西学院大学社会学部，准教授）『環境問題の科学社会学』世界思想社，2011 年発行の著者。長良川河口堰問題を事例に取り上げ、環境問題と陸水学、生態学、河川工学、経済学との関係を実証的な歴史社会学研究から論じている。

話題提供・討論者：村上哲生博士（名古屋女子大学家政学部，教授）名古屋市職員時代から長良川河口堰関係の調査に取り組み、日本の河川にも potamoplankton が存在することを明らかにした。故郷熊本の川辺川ダム問題でも精力的な現地調査を行う。現在、長良川河口堰の開門問題を扱う愛知県の長良川河口堰最適運用検討委員会の１人。

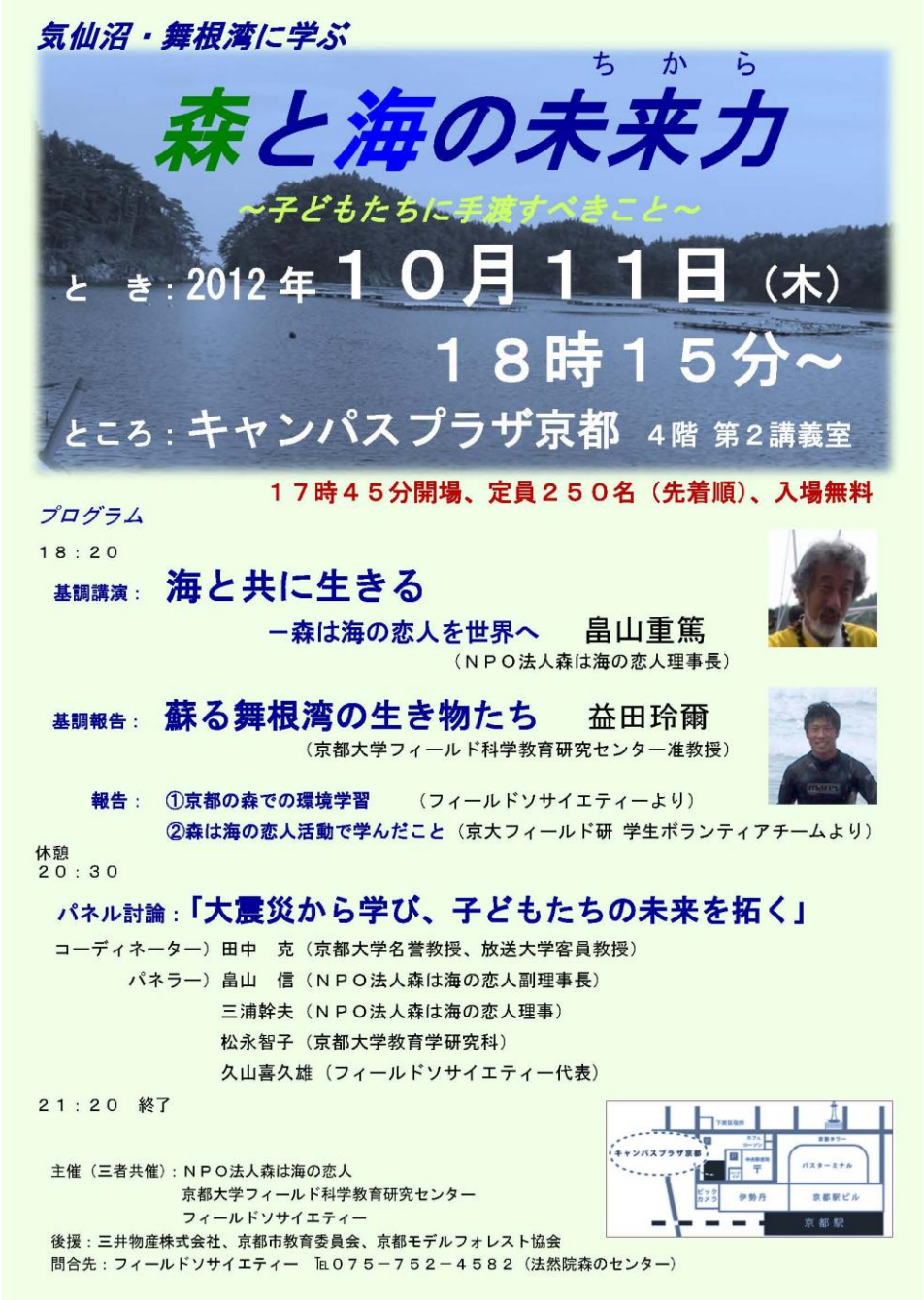
司会：野崎健太郎（椙山女学園大学教育学部）

後援：愛知県

大会 web site：http://www.isc.chubu.ac.jp/jslim77/symposium.html

---

【近畿】



日時：２０１２年９月１６日（日）、１２~１４時

●気仙沼・舞根湾に学ぶ「森と海の未来力（ちから）」 講演会

NPO 森は海の恋人の運動で知られる気仙沼市舞根の住民たちは、震災で被災した埋め立て地を元の干潟に戻し、全員で高台に移転することを決めました。しかし、国の大防潮堤建設計画が、舞根でも実施されようとしています。
人々の暮らしと海を隔絶する大型防潮堤の建設に反対の陳情を行っていますが、宮城県知事は住民が不要だと言っているところにも、大防潮堤を作ろうとしています。その住民運動の中心になっている畠山重篤さんとそれを支援している京都大学やその他の研究者が、海と共に生きる漁業者たちの思いについて、熱く語ります。

●和歌の浦干潟観察会（第２０回）

観察予定地：観海閣（妹背山）周辺の干潟

　ハクセンシオマネキやチゴガニ、コメツキガニの砂団子、水際に群がるヤドカリ類、テッポウエビ、絶滅危惧種のイボウミニナなど、たくさんの生き物を観察できます。今年も例年の観察会に加え、市民参加型の生物調査（助成：日本財団）も行います。生き物好きのあなた、是非ご参加を。

集合時間と場所：１２時に観海閣（玉津島神社の向かい）但し、雨天中止（小雨決行）

費用：資料一部２００円、希望者のみ

服装や準備物、その他注意点：長靴または泥にはまっても良い靴（サンダル・水雪駄は泥に足を取られるので不適）。帽子、軍手、タオル等、採集道具や飲食物、着替えは各自の判断で。

主催：和歌山大学教育学部生物学教室　　わかのうらひがた楽部

問い合わせ：e-mail: tkoga@center.wakayama-u.ac.jp または０９０-４４９９-３１５７，古賀まで

【中四国】

●パネル展示と講演・討論会
「中海浚渫くぼ地の環境修復をどう進めるか」

【九州】

●長崎大学海洋環境科学情報発信シリーズ　セミナー「海と地球と人と」

東シナ海にくらす魅力的な生物たち

内容：東シナ海は、日本にとって最も重要な海洋資源の供給場所の一つです。しかしその環境は大きく変動し、生物資源も急減しています。長崎大学では、東シナ海の海洋生物資源を持続的に利用するための研究に取り組んでいますが、その成果を広く一般の方に伝え、東シナ海の重要性とその魅力を理解していただくために情報発信を企画してきました。今回は、「東シナ海に生息する魅力的で多様な生物たち」に焦点を当て、その暮らしぶりを人間活動や近年の環境変動の影響などとも関連付けて紹介いたします。今回のセミナーでは、沖縄美ら海水族館名誉館長の内田詮三氏と本学の山口敦子教授に話題提供をいただきます。

講師：沖縄美ら海水族館名誉館長　内田詮三氏、
　　長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授　山口敦子

開催日時：2012 年 10 月 5 日（金曜日）17:00－ 19:30

開催場所：カフェみねるばの森（長崎大学東京事務所）　東京都千代田区九段北 1-9-17 寺島文庫ビル 1F

会費：1500 円（ワンドリンク+サンドイッチ付き）

募集人数：30 名程度

募集期間：2012 年 8 月 28 日より 9 月 28 日まで。但し定員になり次第募集を終了いたします。

募集方法：インターネットによる申し込み。セミナーの詳細につきましては、随時 HP で情報を提供するとともに、参加を申し込まれた方にはメールで連絡させていただきます。

申込みはこちら http://mg.jimu.nagasaki-u.ac.jp/smart/eq.asp?U=5001000000004067101&page=1

【プログラム】

16:30～　開場

17:00～17:05　開会挨拶

17:05～17:55　講話：沖縄美ら海水族館名誉館長　内田詮三氏

17:55～18:45　講話：水産学部 水産学科 海洋資源動態科学講座　山口敦子

18:45～19:30　質疑応答、意見交換

19:30～　閉会挨拶

セミナーに関するお問い合わせ 095-850-7701

主催：長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科

4.「ジュゴンを追って」(5)　向井　宏

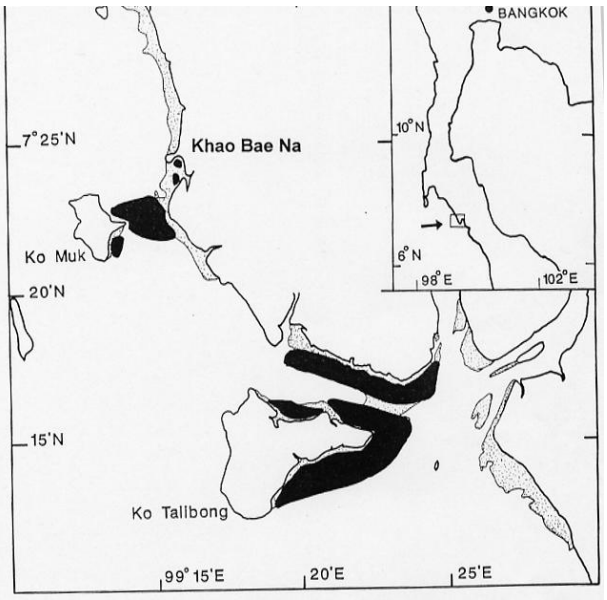
タイ・トラン県のジュゴン

こうして、われわれが最初意図した調査は、思った以上の成果を上げることができた。もちろん、われわれの調査は、ジュゴンの摂餌を調べるだけではなく、このハード・チャオマイ国立公園の沿岸の海草藻場の実態と、ジュゴンの摂餌が藻場に与える影響を調べることを目的としていた。「コ・ベナ(Khao Bae Na)」では、ほとんどがウミヒルモの群落に覆われていて、ところどころベニアマモ *Cymodocea rotundata*

のパッチがある。その他には、水路沿いに少しのウミショウブの群落が散らばり、小さな *Halophila beccarii* の群落があるくらいで、この地方の典型的な海草藻場ではなかった。

「コ・ベナ」から南へ舟で 15 分ほども行ったところに、広くて立派な海草藻場がある。そこは、「ラム・ヨン・ラム (Laem Yong Lam)」と言う地名のところで、地元の人も大潮の干潮時には、貝などを採るためにやってくる。真夏のような熱帯の太陽に照らされた海草藻場の中を潜ると、日の光にきらきらと海草の葉が輝いて、光合成で作られた酸素が葉の表面に泡を作り、それが少しずつ葉から離れて水面に立ち上っていく。その光景は、まるで天国の光景のように思えた。カーン教授の提案で、われわれはここの藻場を「スワン・サワン (Suwan Sawan)」と呼ぶことにした。タイ語で「天国の庭」という意味なのだそうだ。

この「スワン・サワン」には、リュウキュウスガモ *Thalassia hemprichii* が卓越するところ、ウミヒルモ *Halophila ovalis* の群落、リュウキュウアマモやボウバアマモ *Syringodium isoetifolium* の混群落、ウミショウブ *Enhalus acoroides* が優占するところなどが広がって、全体として広い海草藻場を形成している。少し深いところでは、ウミショウブの純群落が広がっている。全体で、野球場二つ分くらいの広さがある立派な藻場である。しかし、残念ながらここではジュゴンの食み跡はほとんど見つからなかった。やはりウミヒルモの純群落が非常に少ないことが、その理由のように思えたが、本当のところはよく分からない。



そこからさらに舟でのんびりと南に 1 時間近く行くと、タリボン島（もしくはリボン島）という島に着く。コ・タリボン(Ko Talibon) である（図）。かなり大きい島で、集落もある。この島は、トラン県でもっとも大きい川であるトラン川の河口に面して位置している。この島の東側（河口側）には、広大な海草藻場があり（図の黒色部分）、ここに多くのジュゴンが餌を食べに集まってくることが知られている。島の南東側では、浅い海底が広がり、そこにはウミヒルモの純群落が成立している。潮が引いたときにこの藻場は完全に干上がってしまうが、そのときに藻場の中を歩いてみると、たくさんのジュゴンの食み跡が残っているのを見ることができる。

タイのプーケット海洋生物研究所でジュゴンの研究をしているカンジャナさんが空から観察した結果から推定したトラン川河口部のジュゴンの生息数は、約 50 頭ということだった。タイ国中でもっともジュゴンの個体数が多いところだろう。プーケットなどタイの西側（インド洋側）は、東のシャム湾側よりもジュゴンが多いと言われているが、その中でもトラン川河口は、ジュゴンがもっとも多く棲んでいるところになる。

図　トラン川河口部で撮影されたジュゴンの群れ。約20頭が見られる。

しかし、トラン川は大きな川で、水は濁り、タリボン島との間は狭い海峡となり、流れは速い。潜ってジュゴンをみることはほとんど無理だった。舟で行くときに、運が良ければジュゴンに遭遇することができる程度である。ここでも海草藻場の調査を行ったが、ジュゴンがこんなに多く生息しているにもかかわらず、濁りと流れの速さで潜水調査は困難を極めた。浅い海底に潜っていると、体があっという間に持って行かれてしまう。鉛の錘を体にいっぱい付けて、重さで海底を這いずるようにしないと、体を安定することもできない。満潮や干潮になって潮が止まるときを狙って潜るしかない。それでは、短時間、ほんの10分程度しか潜っていられない。結局、トラン川河口での調査は、あきらめざるを得なかった。

沖縄でジュゴンの再発見　基地建設とジュゴン保護の浮上

われわれが調査を試みた1998年から数年たったあと、京都大学の荒井さんや水産工学研究所の赤松さんらが、水産庁の研究で、ジュゴンの発する音によってジュゴンの存在を認識する音響機械の開発に、この場所を訪れて、研究を行った。彼らの研究は、水の濁りや流れを気にしないで、ジュゴンの居場所を探す点で、このタリボン島周辺の海域は、もってこいの場所だったのだろう。実はこの頃、沖縄の米軍普天間基地の移転問題が起こり、辺野古のキャンプシュワブ沖を埋め立てて、米軍の新たな基地を作るという計画が日米両政府の間で進行していた。それに反対する住民の運動が盛んになっていく中で、沖縄にジュゴンがまだ生存していると言うことが明らかになった。住民からジュゴンの保護が叫ばれるようになり、ジュゴンがしばしば漁網に掛かって死亡することから、沖縄では小型定置網などの漁業者への圧力が感じられるようになった。水産庁では、ジュゴンの混獲を防ぐために、定置網にジュゴンが掛からないようにするための方策を探る研究を始めていた。荒井さんたちの研究は、その一環で、ジュゴンを定置網に設置した音源で追い払うために、ジュゴンと音の研究をすることになったと聞いた。なぜ沖縄でやらないのかと聞いたら、ジュゴンの個体数が少ないことと、沖縄では住民からの騒音（意見）

が大きくてやりにくいからということであった。たしかにここトランでなら、何にも気兼ねなく研究がやれるのだろう。しかし、水産庁の思惑と少し違って、ジュゴン自身が発する音の研究が、ここでは行われていた。もちろん、それも含めて、ジュゴンと音の研究で、ジュゴンの混獲を防ぐための方策は、音を使ってある程度はできるだろうという予測は立った。

ほぼ同じ頃、防衛庁（当時）と環境省は、ジュゴンを空中から発見して、沖縄の個体群を把握しようとした。環境省は、ジュゴン個体群の保護のために、防衛庁は辺野古基地を作るためにジュゴンの存在が邪魔にならないために、調査を行ったのであろう。どちらも飛行機を駆使して広域を調査したものだったが、結果はいくつかの海域でジュゴンの撮影や発見があったというものだった。沖縄におけるジュゴン個体群の実像ははっきりしなかったし、何個体いるかについても、はっきりした答えは出なかった。けれども、二つの調査の結果から、沖縄県東部の海域を中心にジュゴンがあちらこちらの海域で発見されていることが分かった。同時に行われたジュゴンの食み跡調査では、名護市東海岸の嘉陽の海草藻場にしばしば多くのジュゴンの食み跡が残されていること、西部では、海洋博覧会が開催された本部半島の北側、とくに古宇利島周辺でジュゴンの食み跡がしばしば発見されていることも判明したことは、沖縄のジュゴン個体群の現状を少しずつ明らかにすることに役だったと思われる。　　（つづく）

5．きらめく動物たちの命と海
【久保田信の白浜だより（その31）】

ウミガメの未来

▲京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”での産卵

砂浜を歩いていると死亡したウミガメの漂着個体ばかりでなく、ほほえましい光景に出くわすこともある。2003 年夏にもアカウミガメの卵をじかに見ることができた。これは、瀬戸臨海実験所へ勤務してから初対面の 1992 年の産卵時の遭遇に続く２度目の対面だった。知人が北浜で砂の表面に出ていた数個の卵を 2003 年８月下旬に発見し，発見し知らせて下さった。元瀬戸臨海実験所職員の田名瀬英朋さんとともにその現場に行ってみたところ、7 月初旬に田名瀬さんがウミガメのはった跡を発見し記録済みの地点と一致した。通常２箇月でウミガメ類の卵はふ化するので、すぐに掘り出すのは止めて、完全に孵化し終わった時点を見計らって、いろいろ調べることにした。

９月中旬になって瀬戸臨海実験所に全国から多くの大学生がやって来た。実習のスケジュールには入ってなかったが、ウミガメの孵化直後の時期とちょうど重なったので、学生たちに孵化の確認を穴掘りをして見てもらった。驚いたことに、50cm の深さで予想よりも浅い所に卵があった。波浪などで地形が変わりやすい北浜の砂浜だから、幾つかの卵が表面まで放り出されたのも納得できる。卵は全部で 100 個余りあった。その６割ほどが孵化に成功していた。残りは黒ずんだ塊と化して、死んでいた。紀伊民報記者が学生たちにインタビ

ューした。ウミガメの卵について、「陸に上がって深く穴を掘って産卵するので、硬い殻と思っていた。こんなに軟らかいとは思わなかった」などと驚いていた。

３度目の遭遇も臨海実習中の発見で，同じ北浜で数個の卵が出ているのを学生が発見した（図）．そっと上の部分を砂をちょっとだけどけて調べてみると，17 個はどうやら死んでいた．折からの台風 15 号の高波で砂浜の潮位のもっとも高い部分に産卵されてあったのが掘り出されて海水につかったからだ．でもまだ新鮮であった．数十ｃｍほどのかぶさっていた砂がなくなっていたのでしかたないだろう（図）．下にまだある卵は生きているかもしれないので，その上に砂をかぶせておいて様子をみることにした．

▲ウミガメの未来は暗い

自然界は厳しく、ウミガメを取り巻く環境はどんどん悪くなる一方だ。このような状況の中で、生まれ故郷のここ北浜に戻って産卵できるのは、ほとんど奇跡に近いだろう。瀬戸臨海実験所に勤務する地元出身の職員や古くから白浜町で暮らしている方々は，「昔は、このあたりでウミガメ類の産卵がよく見られたものだ」という。白浜町ではウミガメ類の産卵は、昔話になりつつあるようで残念だ。

一方、ごく最近、ウミガメ特有の奇病「フィブロパピロマ」の慢延が懸念されているという報道もあった。ますます気がかりだ。南部町の千里の浜では、最も多い時に上陸 900 回（1990 年）、産卵 348 回（1991 年）の記録もあり、『ウミガメ銀座』状態だったが、その後は減少の一途をたどり、2003 年だと上陸 155 回、産卵 75 回となった。産卵に適した砂浜の減少に加え、近年、漁網や漁獲法などがすこぶる発達したことから、混獲によって相当数のウミガメが犠牲になっていることが想像できる。希少動物であるウミガメを、子々孫々まで残すのは、我々の義務だ。

ところで、米国のデューク大学の研究グループは、このほど、世界中で年間 30 万個体ものウミガメ類が、誤って漁網にかかったり、マグロはえ縄にかかったりして混獲されているとの試算を出した。同グループは、アカウミガメやオサガメが、過去 20 年間で 80～90%も減少したことを指摘している。混獲後の死亡率は不明確だが、アカウミガメは、太平洋だけでも年間数万個体が死んでいると見積られている。ウミガメ類の未来は暗すぎる。

図　白浜町京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”でウミガメの卵に遭遇（2012 年８月２８日）

6．事務局便り：

●「うみひるも」は「海の生き物を守る会」のメールマガジンです。配信が迷惑と思われる方は、事務局までご連絡ください。

●このメールマガジンの配信を希望する方がありましたらアドレスをお知らせください。

●このメールマガジンは転載自由です。海の生き物に関心を持っている方に広く読んでいただくために転送をお願いします。ただし写真を別の目的で使用する場合は事前にご連絡ください。

●本会は自然観察会や講演会を各地で実施しています。各地で開催を希望される方、開催をお手伝いできる方は、ご一報ください。また、各地の団体との共催も行います。ごいっしょに講演会や観察会をしたいと思われる団体からも提案をお受けします。

●本会への寄付をお寄せください。寄付も会費も同じ銀行口座「ゆうちょ銀行　口座番号：１０６１０－６６７３０２１　海の生き物を守る会」へお送りください。なお、送金される場合は、送金の内容について事務局にお知らせ下さい。

7．編集後記

立秋も白露も過ぎても、いまだ猛暑が続きます。今年はどうしたのでしょうか。いや、今年もどうしたのでしょうか。気候変動の異常さが目につく近年です。おそらく海にもいろんな変化が起こっているに違いありませんが、私たちは海の生き物のことを心配する余裕を失ってきています。福島第一原発の事故はいまだ収束の道筋も見えてきません。4 号炉の使用済み燃料プールは、次の大きな地震で、崩壊

の危機が続いています。そうなれば、これまで以上に大量の放射性物質が世界にばらまかれてしまいます。野田政権の新エネルギー政策で、2030 年代までに原発ゼロを可能にする環境を作るということが決まりました。あいかわらず抜け道を造った上のことですが、とにかく原発ゼロを目指すことが決まったのは、なによりでした。上関の原発の新設は、どうやらなくなりそうで、瀬戸内海の最後の楽園、奇跡の海といわれた海域は、守ることができました。しかし、自民党はいまだに原発は必要という路線を変えてはいません。次の選挙を経たら、またぞろ上関原発が復活しかねません。気を抜かないで、瀬戸内海を守っていかねばならないでしょう。（宏）

会員は本会の趣旨に賛同できる個人・団体とします。会費は個人 2,000 円／年、団体 20,000 円／年。匿名による参加も可能。会員は、各地で海の生物とその環境を保護・保全する活動を行い、そのための助成金申請をすることができます。入会希望の方は、事務局　hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp （向井）まで、氏名、住所、メールアドレスをお知らせください。

メールマガジン『うみひるも』第 105 号
2012 年 9 月 16 日発行
発行＆編集人「海の生き物を守る会」
代表　向井　宏
〒606-8413　京都市左京区浄土寺下馬場町 69 番地
TEL&FAX:075-741-6281　メールアドレス：hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp
ホームページ URL：http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html
銀行口座：ゆうちょ銀行　口座番号：１０６１０－６６７３０２１　海の生き物を守る会